

「SOKENDAI-KEK 共同研究」 KEK 最初の 10 年

総合研究大学院大学

平田 光司

時間も迫ってますので、なるべく早く予定通り懇親会に行けますように、ご協力宜しくお願いします。

私もオーラルヒストリーについて話すんですけども、これはアーカイブズの研究会ですけども、私の話はオーラルヒストリーをアーカイブするというような方向ですので、ちょっと立場が違います。

アーカイブズとしてのオーラルヒストリーじゃないので、これは SOKENDAI-KEK の共同研究として、既に始まったというかな前からやろうと思っていたんですけども、延び延びになっていたのをこの際思い切って始めました。

上手く行くかどうか保証は無いんですけども、なにしろやらなくてはいけないのでやるという事です。

テーマとしては「KEK 最初の 10 年」というのをやります。この理由も説明しますが、私が考えているオーラルヒストリーというのは、要するに記憶を記録するという事です簡単に言えばですね、ちょっと誤解を招くかも知れないけれども、例えば世の中には回顧録というものがあって偉い先生が回顧録を書くわけですけども、そうするとどんな家に生まれて、どんな人と付き合っ、何故物理学をやって、なんであいつと喧嘩した、そういった事がずっと書いてあるけれど、例えばそれは非常に役に立つ資料ですが、皆が回顧録書くわけではないので、世の中には回顧録など全然関わらない人もいっぱいいると言うことで、その場合回顧録についてですね史料的に間違っている所もあるわけですがライフヒストリーの観点からは、むしろ間違っていることはそれはそれとして意味がある、何故間違っているかとかですね、場合によっては間違いとも言えない何とも言えない解釈の違いだということもある、そういう所が面白い訳です。

何があったかではなくて、何があったかと思っているかということに注目します。そこが歴史研究とちょっと違う所かと思いますが、例えば典型的なの

は東京大空襲のオーラルヒストリーで自分はどんな体験をしたかですね、例えば後で調べてそんな所に爆弾落ちてないとかいうことがあったとしてもですね、落ちたと思っているのはしょうがないので、あと被差別部落、こういうような人達は普通回顧録など出版する人達ではない、元々オーラルヒストリー始まったのは字を書けないような人達へのインタビューという事があった訳ですが、アメリカ等は段々物理学者に対するオーラルヒストリーも始まるようになってきました。その場合問題意識としてはですね、基本的にはこれちょっと乱暴な言い方になるのですが、事実を解明するのではなくてそれはどう解釈されてきたかという事にですね、そちらに重点を置いているという事です。

オーラルヒストリーは普通はですね、インタビューした人が大勢の人に話を聞くのですけれども、その人が記録をある意味専有します。

論文執筆の後には、例えばテープなんか全部廃棄する、それが仁義だと言われていています。

論文書く場合もAさんとかにして、誰だか分からないようにして書く訳です。

そういうのをよく見ると思うんですけども、但しKEKの研究をやる時にAさんがでは済まないの、こういった所はちょっと違って来るだろうと思います。

結局歴史研究の場合には、文献資料、法人資料などと相補的に中の人達がどのように考え何をやったか、それを今どう思っているかとかそこが大事じゃないかと言うのは、先程松岡さんから紹介あったように、科学と社会の関係をやる時にいかに科学が作られてきたかだけ注目するのではなくて、その科学がどういう社会で作られてきたか、またはそれはやっている人にどういう影響を与えたかということも含めて、やんなきゃしょうがないですね。

例えばKEKの研究する場合だと、KEKの周辺の人達のオーラルヒストリーもやりたいと思うんですけども、それは別にKEKが物理的なノーベル賞には関係ない訳ですが、だけでもKEKという存在が回りにどういう影響を与えてきたかという、それを考える上では欠く事の出来ない情報な訳ですね。

ということで、普通の歴史研究よりは非常に広く、普通のと言いましたけれども、最近の歴史研究もですねいわゆる事実の探究だけじゃなくて、社会

性とかいう所に注目するようになってきているようですので方向としては似てるんですけども、どちらかというところむしろ社会学の調査に親近性があると思うんです。いろんな人達がいて、いろんな事言っていると、たまには食い違うこと言ってるという所を分析していく訳です。

ですからこの場合オーラルヒストリーの場合も、対象というのは様々な人達、KEK だったらですね官僚まあ事務官ですね、指導的な研究者、例えば高橋先生のような研究者もあるし、下っ端の研究者まあ私のようなですね、へーへーと仕事をしてきた、あとは大学院生ですよ、当時大学院生でここで共同研究していた人達で後で偉くなった人もいっぱいいる訳で、だけど偉くならなかった人もいる訳で、そういういろんな大学院生とか、技術者とか、会社から来ている人、秘書、研究者の家族なども対象、周辺住民というのも当然ありますが、周辺住民の人が大体秘書になっているのでそういう意味では総合的な研究をやりたい。

オーラルヒストリーというのはライフヒストリーというものですけども、特に巨大科学のオーラルヒストリーというのは実はあまりやられてないというのかな、例えば非公式な所を含む歴史、これはさっき木村さんが紹介したような研究でも対象になっていることだと思います。

その他にどんな人物がいて、どんなコミュニティが出来ていたかそこでのある種のカルチャーが形成されるわけですね、いかにも KEK らしいやり方とかですね、そういうものが何故出来たのかとか、それはどんなものなのかとか、結局そういったライフヒストリーをやります。

これはオーラルヒストリーな訳ですけども、さらにそれをアーカイブズして行きます、この記録というものが、科学と社会という観点からとても重要ではないかと私は思っているわけですが、巨大科学のオーラルヒストリーやるんだだけでもそれは要するに巨大オーラルヒストリーと言う事にもなります。

つまり、大体この間聞いたら1年で何人のオーラルヒストリーが出来るかというところ、いいところ5人だという話だったので、例えば1000人やるには200年かかるわけですからこれは無理なんですね、必然的に大勢の人が参加してやらなくてはいけないわけです、というわけですねこれまで家内工業的に行われていたオーラルヒストリーという作業を巨大科学化するとい

う、物理学で起きた事をオーラルヒストリー業界でもやってみようかという
ようなちょっと野心的な試みなわけですが、それでともかくグループでや
らなきゃいけないグループの中で資料を共有化していくという事は当然です
が、学問業界例えばオーラルヒストリー学会というのもあります、社会学会
とかですね、そういう所で共有財産として誰でもアクセス出来る様な資料と
して出来れば非常に大成功だと思っております。

やるには Incoherent いろんな研究者が自分のやりたい方針でやって、成
果を発表すると、成果は論文やデータの形で共有することは出来ます、大勢
の人が関わる事で Incoherent というやつですが、Coherent のある種の統一
した方針でやると、そうなると資料の持つ価値というのがやはりかなり高く
なります。

統一した方針を徹底するとアンケートになっちゃって別の調査になるわけ
ですが、この場合に特に KEK などやる場合、1つはオーラルヒストリーの
論文に普通に出てくる匿名性はどうか、これは匿名では意味無いので駄
目です、こういう事をやった時の学問研究における意義は面白いからやりま
すだけじゃすまない所もあるのですが、はっきり言って分かりません、分か
りませんというのは前例がないので、やって見なきゃ分からないんですが、
私の山勘として非常に意義があると思っております。

つまりある程度の人数をやれば、これまで見えなかった傾向が見えてきて、
実はこうじゃないのかとか仮説が出来てくるようになれば、社会学に新風を
吹き込むとかですね科学史に新風を吹き込む事も期待出来るかなと思っ
ております。ここはやってみなきゃわかんない。

KEK 最初の 10 年ですが、共通の質問をやります、それはいろいろあるの
ですけども、ここではちょっとマル秘ですが、プラス、インタビューやる
人も自分としてはこう聞きたいとあるので、半分位になって 2 時間位を 1 つ
の回としてやります。

とりあえずぱっと思いつくのは、初期の共同利用実験に参加した人達、特
に大学院生ですね、それから初期に来てここで家族やってた人達、子供とか
奥さんとか、というのは最初の 10 年でフォーカスしますのでその後ずー
と KEK にいた人はその後の影響も結構入ってくるので、最初の 10 年に関
わった人をフォーカスした方がいいかなと思っております。

これをまたアーカイブズを行う KEK の史料室で保存・公開するわけですが、こちらのほうにも問題があります。

とりあえずこのプロジェクトでは、テキストのみをアーカイブズの対象にします。

テープその他になりますと色々面倒な問題があり、あとプラス PS の映像、記録映画を作りたいのですがこの間映像の本を読んでいたら、廃墟というのは映像にとって最高なんだという話で、PS せっかく残っているので今残っている部分をリアルに残しておきたい。

PS (Proton Synchrotron) は KEK が出来て最初に作られた加速器ですね、このあいだ大活躍してシャットダウンしたのですがそれでも、幸いまだほとんどまだ無傷で残っているので、形のあるうちに映像に留めたい、これはちょっと他のとは別です。

これをやることの意味はですね、やってみないと出てこない問題というのがあるので、こういったものを将来大々的にやる場合の問題の洗い出しという面もあります。

ちょっと KEK の事紹介しますと、1971 年に創設されるのですが実はそれまでの 15 年位のもの凄い過程があった訳です、ここの所は本当は非常に大事なわけですがけれども、あまりの錯綜しててですね、それからこの頃は物は無かったので要するに理念とかが問題だったと、ところが出来てから実際物を作らなきゃいけない、その為には何も無かったわけですから、まず建物とか組織、初の共同利用機関としてのいろんな組織的な問題が発生するわけです、この頃ほとんど文化果つる場所であったつくばでの生活ですねこれも含めて、特に PS の加速器とビームラインに関わる様々な問題、共同利用というのも核研ですで行われていましたけれども、全国的な大々的な共同利用システム始めること自体が問題があったと思いますし、KEK-PS は出来た時はその時の国際水準からはるかに 2 桁近く遅れた加速器だったわけですが、そういう状況で皆さん何を考えていたのか、なかなか公式文書には出てこないことがあります。

特に最初の 10 年の面白い所は、1974 年に素粒子物理学を一変させるような革命的な発見があってですね、これで小林先生もノーベル賞貰えた訳ですけれども、だから 1971 年と 1980 年では高エネルギーの世界は全く変わっ

てしまっています、その中で人々、特に研究者が何を考えていたかこれもなかなか聞いてみないと分からない所があります。

でも 10 年後にはトリスタン計画が国会で審議されて 1981 年に確か予算が通るんですが、それからその間に PF (Photon Factory) という物質科学に利用出来る様な加速器も出来たと。

ここの最初の 10 年は非常に大事で、その後の高エネ研 (KEK) の原型が出来たと言っていいと思うのでここにフォーカスするのは悪くないと思います、その後は 10 年単位で見ると非常に順調に発展してきたといえると思いますけれども、その根があるのが最初の 10 年であろうという事で最初の 10 年です。

すでに問題となっている議論した事を紹介しますと、木村さんも言いましたけれども、個人情報保護の問題ですね、それから逆にもう 1 個公開の制限というのがあります。

アーカイブズする側としては何でも皆さんに見せたい訳ですが、そうもいかないものもいっぱい出てくると、それからインタビュアーが喋ったけどここはやはり出したいくないというのをどうやって保証するかなど様々なすぐ思いつく問題がある訳ですが、これも新機軸のアイデアで乗り切る予定です。後で説明しますけれども。

後は Transcript という書き起こしの形式とか、非常に忠実に書き起こすのか、ケバとりをしてスムーズに読めるようにするのか、これもいろいろ議論がまだあるのですけれども、少なくともこのプロジェクトに関しては忠実に書き起こすと、忠実に書き起こすと非常に読みにくいです、えーとかあーとかええーとかそんなのがいっぱい書いてあって、何喋ってんだとわからないんだけど、ただテキストしか残さないという方針だと、忠実にやっていくしかない、ケバとりしたものから忠実なものを再現するのは不可能ですのでケバとりはいつでも出来るのでとりあえずこれでやる予定です。

それから非常に大きな問題はインタビューする人が不足しています、これも大問題なのですけれども、例えばオーラルヒストリー学会で、私がこのプロジェクトの説明をいろいろしたのですけれどもあまりのってこない、やはり皆さん東京大空襲とかそういう方に興味があるわけですね、科学はねー、という感じがどうしてもあるんです、科学史学会でオーラルヒストリーを

やる時はいろいろまた悪口があってですね事実がどうだとか言われて駄目だし、一番近いのはこの辺の人達ですけれども（資料7）日本で科学人類学というのはほぼゼロだと思います、科学社会学は数人いますが、いずれにしてもマイナーな人達でとてもマスとしているんじゃないんだけど、この辺のところを掘り起こしをかけなくちゃいけない研究者増やす事もこのプロジェクトの目的なので、金で釣るわけじゃないけれども、いろんな学生さんとかに多少アルバイトのつもりで、やって貰えるようなシステムを考案しました。でこの辺一応クリアした上で始める訳です。

実際の流れですけれども、聞き手と語り手、インタビュアーとインタビューですね、まずこの間で同意書を作ります、このレベルでは KEK 史料室は出てこないです、ある人が興味を持ってこの人のインタビューを行う、その同意書というのには、例えば同意書というのにはいずれ公定機関にアーカイブして公開しますということを書くけれども、むしろこの書き起こしでいいですねということも含めて、この2者の中で合意をとってもらいます、合意をとった上で今度はこの聞き手とアーカイブズ室、史料室の間の同意書があります、どのようにとり扱うかほとんど約束であって、語り手とアーカイブズ組織が直接関わるとなにかと難しいです、例えば核融合研のオーラルヒストリーだとですね、それは核融合研としての記録なのかとそういうことと言われるとですねうーんということになりがちです、それは研究者とインタビューの関係なんですというふうに言う。だから難しい問題がこれでクリアできるというか、脇に置くことができるというまあ姑息なやり方ですけれども、それで聞き手はだから両方に対してある種の義務とする権利を持つんですね、この人はアーカイブズのメンバーである必要はないわけで、興味もった人がやってそれがあるクオリティを満たしていれば史料室がそれを保管してアーカイブしますとそういうことです。

同意書、まず語り手と聞き手の間の同意書には、写真や書きおこしを語り手がチェックして、ここは消してくれという所を指定してそこは完全に消します、これでいいですと判子を捺してもらい、語り手はですねその書きおこしが保存アーカイブズされると事をこれで承諾、これも判子ですね、逆に聞き手のほうはですねこれは義務ですけれども、取り決めに重視する、だから例えばここは消せという所を消して守秘義務を持つのは聞き手です、これに関

してアーカイブ室は一切責任持たない、関係ないから、著作権は語り手が持つということになりますが、聞き手のほうは使用权、研究における使用权は保有するということが同意書に書かれています。今度はインタビュアーとアーカイブ組織、この場合 KEK 史料室ですけれどもその関係はですねアーカイブ室に行くと、非公開にした所はもう削除されています、だからこれはいい、時限付き公開というのもあるのでそこは明記して、あとはアーカイブズ組織に委託します、あとは知らないよというかな宜しくお願いしますということなんですけれども、アーカイブズ組織 KEK 史料室の方は、いろんな事管理、例えば原本を保有してですね基本的には管理の下でそれを公開します、場合によってこれはとても公開できないよということがあります、実例として私もこれはちょっとしない方がいいんじゃないんですかと言うようなインタビューもある訳で、その場合に非公開とすることが出来るような取り決めをします、つまり渡された物を無条件に公開するんじゃなくて史料室としての判断でここは押さえる、捏造はだめ、ここはこう書き換えるとかはだめですけれども、墨で塗るのは自由でこれがないと KEK 史料室としては非常に困るので、それはアーカイブ組織の判断であることをちゃんと明記した上でやってもらう。インタビュアーの方はインタビューイに対してですね史料室の方でこうなんだよという事で弁解も出来る。但しインタビュアーはだいたい普通研究者ですから、語り手が最初絶対だめとって消してある所以外は、自分として資料を持っていて利用する権利がある、利用権はインタビュアーにある。だからその人が例えばアーカイブ室がここは隠してるんだけど私は公開しますといたらそれはしょうがないと、その場合は自己責任で、なにしろ約束としてはインタビューイはいいですよと言っているのですから、それを公開するのは本人の自由です。それで何かおきたら発表した人の責任という、そういうことでインタビュアーのある種の責任というかな、だけどもある範囲ではそこまでの権利を持つとこれを保証しないと研究者はやってられないわけですよ、せっかくインタビューやったのにみんな KEK で抑えられちゃったなんていったら話しにならないので。こうやって同意書 2 つに分ける事によってですね、それぞれの権利とそれぞれの組織の権利と義務がはっきりするかなという事でこれで行けるんじゃないかと思っています。

という事で実際やってみないと分かんない所がある訳ですけども、この方針で始めて、つぎの1年間で30人くらいをやると、30人くらいやるとだいたいある種の傾向が見えてきてこれはもっとやるべきかとか、これは駄目だとかいう判断が出来ると思いますが、その頃はまたどのようなことになったかご報告させていただきます。

<質疑応答>

三浦：質問というよりはコメントなのですが、私が実際にオーラルヒストリーをやった方のテープおこしをしてもらってそれを編集してるのですが、ものすごく大変なんですね、忠実にとって、それは4日間フルにやりましたので。実はどなたのをやったかという尾崎敏先生のをやったんですけども、英語と日本語が混ざっていてとにかくもの凄い大変なんですね。だから実際に30人やられるのはいいんですけどもおやりになっただけでテープおこしをしてすぐTranscriptを作ることを心掛けられないと大変だと思います。

平田：あのですね実はこのTranscriptは外注します。いい業者を知ってまして非常に忠実にうまくやってくれます。ちょっと高いんですけどもね、幸い私の科研費があるので。そこは30人分位だったらどうってことはないんですが。書きおこしのやり方というのは日本速記協会の基準というのがあってそれに従ってやりますので、だから本当によく出来るんですけども非常に読みにくいです。問題はそれをインタビューイーに見せた時にですね、こんなのやだよとか自分でケバ取りやられるとちょっと困るなど、そこがちょっと今クエスチョンなんですけれども。テープおこしは飯の種に少しやるのはいいけれど、実際に1時間2時間のやつをやるのはですねもの凄い大変で、もう二度と私はやりたくないぐらいだと思います。それはお金がある限りは外注するのがいいと思います。

松岡：間違ったことをそのまま書いておくという話なんですけれどもね、その時に例えば注釈は付けるんですか。

平田：つけますけど、さっきちょっと聞き手と編集というのを入れたんですけど。インタビュアーの義務は、そこで喋ったことが忠実に再現されていることを保障することなんですけれど、それだけじゃ他の人が何なんだか分らんということなんですよね、専門用語ばかり、ば一っと出てきてとか。それも含めて編集者というのが必要です。インタビュアーが編集者になってもいいんですけど、機能としては別で、これはその資料を他の研究者の資料として使えるだけの情報をちゃんと与える。だから例えばここはどうも事実と違うようだとか、この人が言ってるのとも食い違ってるというようなことは注釈として入れます。ただしそのことが事実であることの保障をする必要はない。

安藤：今のご質問についてですけれども、はっきり事実と違うことであることが分かれば注釈を付けるとかですねいろいろ方法があると思うんですが、分からない場合も多いわけですよね。それは後世、それを記録する人の判断に委ねるしかない場合もある。その際に様々な関連情報を提供するという事はやっぱり重要だと思うんで、これはアーカイブズ学で言えばやっぱりメタデータの付与と言うんでしょうか、コンテキストの提供とかそういうことになると思うんですけども、その際にやっぱり忘れてはならないのは、インタビューに関する情報はもちろんのつかるんでしょうけれども、インタビュアーに関する、誰が聞いたのかということも喋る人にとっては大きな要素になるんです、この人ならこんだけ喋っていいとかですね。そのようなことがあるので、それでひとつ思ったのは、2008年11月30日、つまり去年の暮れにですね、立教大学で日・韓・台の国際シンポジウム（「帝国支配とアーカイブズー日韓台アーカイブズ資源共有化の可能性ー」）があって、そこで韓国の国史編纂委員会からの発表があり、そこではこういう国家的プロジェクトをやっているんですね。そこでは、年間いくらかほどのお金を研究者に提供してやるわけです。オーラルヒストリーの提案を研究者からさせて、オーラルヒストリーをさせて、その成果を国史編纂委員会にもらうということなんです。文部省に行ってその訓練をします。

平田：それ僕のアイデアです。科研費の申請書にはそういうこと書いたんですが…。

安藤：いちど疑問をもったのです。例えばアーカイブズ組織が直接やるべきじゃないかと、まあそういう場もあると言うことです。間にこのように研究者が自主的な形で同意書を取り交わしてやっていくという。しかしその場合も今言ったように研究者がどういう立場のどういう人である、どういう観点でやったかということの記録をきちんと付与していくということが、後世でアーカイブズとして活用する際に大きな要素になると思います。

平田：ありがとうございます。アーカイブされる資料には聞き手が誰だとか、それがどんな人だったと、編集者が別であれば編集者と、少なくとも氏名とかですね、聞き取りは誰でもやりたい人というわけじゃなくてそれなりの訓練を受けた人ですから、誰かと言うことははっきり残ります。その人の業績にもなるものとして考える。

高岩：私が最後に質問なんですけれども、記憶の記録という言い方をしている、こういうのはあまりやったことがないという言い方をされましたけれども、ある意味で記憶も特殊な記録で個人の記憶というよりはいわゆる集団記憶というんですか、全体としてはそういうものを考えている感じるんですけど、本当にやったことはないんですか。

平田：例えば東京大空襲みたいなものについてはもうやられてるわけです。だけでもビックプロジェクト、こういう科学研究のプロジェクトについてはやられたことがないということです。

Sokendai-KEK共同研究

KEK最初の10年

2009年1月22日
Sokenda-KEK 研究会

平田光司

総合研究大学院大学
栗山高等研究センター

2. 巨大科学のOH

(1) さまざまなアイデアや計画がいかに生まれ、実現したか、また実現しなかったかなどの詳細な記録、非公式なところを含む歴史、

(2) 人物、コミュニティー、文化の形成と変容の観点、

(3) 様々な関係者(官僚、指導的研究者、下っ端の研究者、放射線・計算機などの研究者、大学院生、技術者、会社の技術者、秘書、研究者の奥さん、家族、付近の住民、子供の学校の先生、などなど)がKEKに何をもちた。また、KEKはその方々に何をもちたか(ライフヒストリー)

これらについては、OHを行い、アーカイブする。KEKその他の基礎科学の研究機関の将来を考える上で不可欠。

1. Oral History

- 記憶の記録
- インタビュー(回顧録)
- 歴史的「事実」に限らず、史料的には誤った記憶ででき、その誤りには意味がある。(何があったと思っているか)

典型的には

- 東京大空襲のOH
- 被差別部落のOH
- 通常はインタビュアーが記録を占有、論文執筆後廃棄

歴史研究にはOHも重要(+文献資料、法人資料、などと相補的)

様々な立場の人(官僚、指導的研究者、下っ端の研究者、大学院生、技術者、会社の技術者、秘書、研究者の家族、などなど)

3. 巨大OHとアーカイブズ

一人で1000人にはインタビューできない。
グループでの共有化→学界での共有化(アーカイブズ)

Incoherent 個々に行い成果を発表する。→関連するOHanを増やし、相互批判を行う。成果を共有する(論文、データ)

Coherent ある統一した方針と観点からインタビューを行う。

匿名性?
学問研究における意義は?

4. KEK最初の10年

- 様々な関係者のOH多数(30くらいは)
共通の質問+インタビュアーの質問=2時間
共同利用実験、大学院生、家族、
- KEK史料室で保存・公開(EAD)
テキストのみ
- PSの映像
- 問題の洗い出し

KEK

-1970 創設までの過程

1971-1980 ゼロからの研究所建設。建物、組織(共同利用機関)、生活、PS、ビームライン、共同利用実験、国際水準からはるかに低いエネルギー、

1974 November Revolution
TRISTAN計画 PF

1981-1990 TRISTAN建設 Booster利用 post-TRISTANをめぐるポリティクス
1991-2000 B factory, K2K
2001-2010 ノーベル賞 JPARC LHC

問題点・論点

1. 個人情報保護とインタビュアー(同意書1)
2. 公開の制限(同意書2)とインタビュアー
3. 書式の統一(内容、カタログ)とtranscriptの質、形式(忠実vsケバとリ)
4. インタビュアー不足(謝金)
OH学会は科学に興味がない
科学史学会はOHに理解がない
科学人類学+科学社会学=minor

4. インタビューから公開まで



同意書

① 語り手と聞き手

- (1) 語り手は、写真、書き起こしをチェックし、公開しない部分を指定したこと、それ以降は変更しないことを承諾する。
- (2) 語り手は結果が資料として保存・公開(アーカイブ)されることを承諾。
- (3) 聞き手は語り手との明文(化された)取り決めを守る。
- (4) 語り手が著作権を持つ。

② 聞き手とアーカイブズ組織

- (1) 聞き手は、語り手が非公開としたところは削除し、時限付き公開の所は明記した原本をアーカイブズ組織に委託する。
- (2) アーカイブズ組織は(時限つき部分は管理しつつ)原本を公開する。しかし、政策的判断からある部分を非公開とすることができる。この場合、時限(5、10、25、100年など)と制限の対象を明確にしておく(研究者のみ、など)。また、それはアーカイブズ組織の判断であることも明記しておく。
- (3) 一方、聞き手は語り手が許容する範囲で、原本を公開、研究に用いることは自由である(アーカイブズ組織の制限に拘束されない)。

興味ある方は



平田光司 総合研究大学院大学
hirata@soken.ac.jp

終